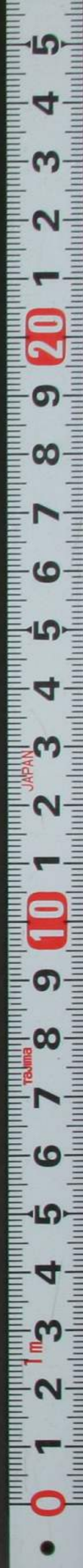




繪本月宵鄙物語 四

13
3154
4



待
3154
4

九二五

所んほしか
市川兼次郎
三丁目
福富町

古今和歌集

我々の那くさるるの史料や
峽捨山小照自をこて

拾遺和歌集

うきれ本の中ひしとひとひのふれ
久米ののこしとゆけ

よみ人あはれ



此巻のこの二巻よりて夕霜が嶽の白姥を善を
あまむまきく山をわたりて捨つりしは恨が亡
来りて嶽を登ひて山をわたりしは越後の團司
拍寄敷の善澤倉より下るとてあやまりて久米
の橋下流のふんとせし成白姥を救ひしとけらし
善光寺に伴ひ家を買てあまむまきく善を植科寺
かかろをまし蘭金別の草履より人殺あふれ
引たて害せんとして善が自捕へられ自ら徳成
切て通るまを佃となせり

那勿吾巻二日



孝子剛作

剛作母白姥

いふてらなぐさめ

かねんさくさめや

姥持山の宵明の月

若林和尚

孝子剛作

月宵鄙物語卷四

姨捨山の焼石

江戸 四方歌垣主人著

其夜去昔をまよとありて昼の中更りせんやと云より夕霜はさうさく
 見えれば白焼のじがりて傍ら離さひ連がじと母は託けて支出せよその後を
 何時も同じ様よのこ云道く唯只太郎を羨慕ひ居れど父えんべさ便も
 なくて妹も半はぬ昔を今人の懲へりて或時夕霜を引捕へて例の血眼
 成て云や何条死後ひの焼一人は隣られて此長所を成りつづ臥のいせ
 べと我よ公を合せく明日のあのお惚を譲り出して野やも山も捨せよ扱
 るん二人降る雲なれ月をいさへと昔も夫のまきり付て姨を控ふる女も在
 ければこそ現山の名も降りられ老朽も不用の人揃ふこと唐天竺より始
 るるるるとさうさくかゝると人の分別より知ることをあへしふ清きなる教はと

せどとも我いし後よせよと否といふ切も突もすまき面つとそを赤壁状
 小責られハ責られ流る果るれ女もよこも為べくやと思ひ成ゆるそさあといと
 いと罪ゆるりなれ明と八月十五日の焼の失はし夫の洋月ありとて伝前香花は
 へるが毎年今日といふかむんが別働隊もか入して墓溜せをけるよ足
 小ついても我子者も哀れ仙の心かほく一日もや庚子を後へしと独言する
 を夕霜はついでよはとほきてあて然かむが甲斐くじくふんとも我者よとる腰
 次押さるも伴ひいふせんよいさ後へ山寺へと誘へハ焼の焼氣あて日比老
 ぼりさる者も連ありく人目見若くそ厭ひりしが何時の間かおぢやじうん
 成るも我も今年ハ痛く弱りゆれば又あんな世の忘日待つんこも影か
 くれハ強くも請てまわらひしは焼成もいひたれよとて頼く外士も留守
 跡も金く夕霜も扶けられ杖ますりて立出しが二丁して早芳れく杖も尻

ちて懸し居る。亦人等たハ不意其合せたる教して立より。白蛇ハ何所へぞ
 と又ハひさへといふ。善を打笑ひて腰二重なる人の這く徳ひん六踏の間中
 ち日暮ぬべし。彼岸の切徳。我者負てふとせん。いさ肩小のけられ。と云
 も敢て捨負より。里人の目よわらじと夕暮。胸を我家へ忍がせ。已と邊
 足氣おしえ走り。約一。千隈河を打渡。約は公付て足ハ何方へ連ゆ
 ぞといへ。而。この山寺に。きりて。さる。んせ。んて。と云。といひは
 高き山。もどぐと入。下。ふ。も。あ。ね。岩。の。上。ま。お。し。を。て。述。わ。れ。が。
 蛇ハあられ。中。といふ。い。人も。せ。く。走。退。一。が。答。太。や。や。や。の。雨。の。蛇。の。声。
 ち。は。り。き。く。に。杜。人。の。の。付。さ。ん。あ。後。日。の。沙。汰。も。う。ら。じ。に。あ。じ。
 に。殺。え。ん。あ。は。と。い。ひ。か。れ。刀。を。抜。て。は。て。再。び。岩。の。上。登。る。ん。と。そ。ん。附。き。あ。り
 合。る。旗。の。風。は。我。る。よ。と。さ。く。袋。石。と。足。の。ゆ。り。と。記。より。て。此。方。

ち。は。向。を。え。れ。が。蛇。も。凄。い。狼。さ。り。若。を。が。刀。を。引。促。さ。る。と。さ。り。り。
 免。さ。は。れ。眼。じ。して。口。耳。の。根。ま。で。ひ。か。れ。唯。一。は。嘔。ひ。つ。と。と。さ。り。蛇。れ
 ち。も。勝。た。と。癖。者。さ。ん。が。これ。を。お。ま。ま。と。刀。の。り。く。拂。ひ。の。く。ら。い。これ。は。お。ま。
 ひ。じ。く。屋。上。の。方。も。奴。を。合。せ。く。お。は。じ。む。と。なる。根。ま。こ。二。正。ま。り。と。さ。り。マ。
 頭。を。並。べ。と。叫。ぶ。れ。も。と。は。も。不。敵。の。答。を。い。へ。も。そ。と。ま。と。あ。り。が。く。旅。て
 刀。を。腕。長。ま。る。の。て。打。り。ひ。つ。後。ま。下。り。杖。を。さ。く。逼。り。あ。れ。は。道。に。棒。を
 は。て。述。ひ。り。ず。あ。の。老。徳。は。し。や。我。を。お。ま。も。必。定。今。宵。の。中。か。れ。る。餅。
 食。と。る。り。ぬ。べ。然。る。が。狼。の。ま。ま。か。つ。け。て。止。ん。も。結。句。ハ。疑。ひ。を。防。ぐ。業。あり
 と。は。隙。に。我。を。ゆ。り。り。叔。又。拜。吉。の。家。に。あり。て。氣。を。折。阿。伽。尼。波。江。新。次。郎。
 ち。の。の。り。と。い。を。と。ま。あ。り。念。仏。す。て。居。り。る。が。蟻。蜂。も。声。を。門。を。せ。て。呼。
 頂。ま。そ。あ。人。が。度。目。影。も。つ。之。の。傳。り。再。行。使。て。門。に。ま。表。ま。出。一。四。二。四。

と出立ひく。登へそ吾太が家のあまそわぐれあふ夕霜が女のいひま。
 此所ゆきと門は詠さうあふは祖母の又へそ。吾冬と祖母とに向ひ居
 て清く次まらん。娘を岩々の上小捨座が今狼や敷立つる人か。耳が
 女のぐきとゆ。卯吉片端をさうて何故よ。お世にわねど。さる。岩に山の中
 祖母の何公地。そつらまそとんと哀れふぢひきて。尻改もさく。走出て其山
 をさしてぞ分入る。此所既。日暮りて。此寂莫村の後なる。鏡基山とつら
 山より中秋の月。昇り。吹とこと空のごとく。空お花障と樂の音はそえ
 と卯吉の祖母を尋る。公感ひ小怪。もはまらふ。踏をとりて登る。あね柳
 坂東のらら。編。高と國ハ此信濃。甲斐上丹。も通。登る。其波
 然後よりも。さる。宅ア。りて。其國なる。に。生國の中。中も。文級山。珠。ま
 と。おられ。月。の。ま。こと。に。明。り。けり。夫。の。姨。石。と。い。ふ。岩。の。の。造。の。桂。の。本

の。一。樹。あ。る。の。こ。や。て。村。木。立。も。さ。れ。は。遠。あ。ん。中。ら。れ。小。岩。の。上。ま。ら。か
 まり。わ。る。人。の。り。卯。吉。の。祖。母。と。い。ふ。より。娘。と。さ。足。の。踏。心。を。も。志。か。に。走。り。登。り
 て。家。お。恙。も。さ。く。て。お。し。た。れ。と。取。進。れ。は。娘。も。心。氣。は。こ。て。ま。こ。り。つ。じ。
 あ。が。さ。の。物。も。い。ま。ど。泣。居。る。が。中。有。て。い。や。り。我。ハ。悪。者。と。嫌。さ。れ。て。世。所。は
 掃。ら。れ。思。く。出。て。人。を。も。身。も。恨。こ。り。け。今。の。間。も。思。合。を。れ。は。さ。ら。う
 頃。此。桂。の。樹。の。木。魂。は。立。立。て。ま。あ。の。林。の。在。る。と。も。ま。に。誤。て。樵。取。さ。れ
 別。飛。ひ。崇。あ。せ。せ。も。それ。が。け。り。に。娘。が。命。を。終。く。と。復。ひ。座。が。思。ひ。を。も。今。月
 此。木。蔭。に。捨。た。れ。の。木。魂。も。我。願。ひ。を。承。け。終。ひ。て。爰。よ。言。と。り。終。つ。る。あ。え
 と。却。て。の。娘。あ。り。る。ん。然。れ。は。少。し。も。さ。り。死。な。が。や。と。願。ひ。を。さ。す。方。ハ。又。何。の
 物。の。ね。せ。少。し。う。形。思。い。た。更。夜。え。あ。る。小。尋。ひ。ま。つ。つ。て。あ。れ。を。見。よ。と。て。三。斗
 斗。尊。と。さ。る。此。姨。名。の。下。に。狼。の。目。を。伏。さ。る。如。く。押。凝。居。る。を。指。び。て。先。刺

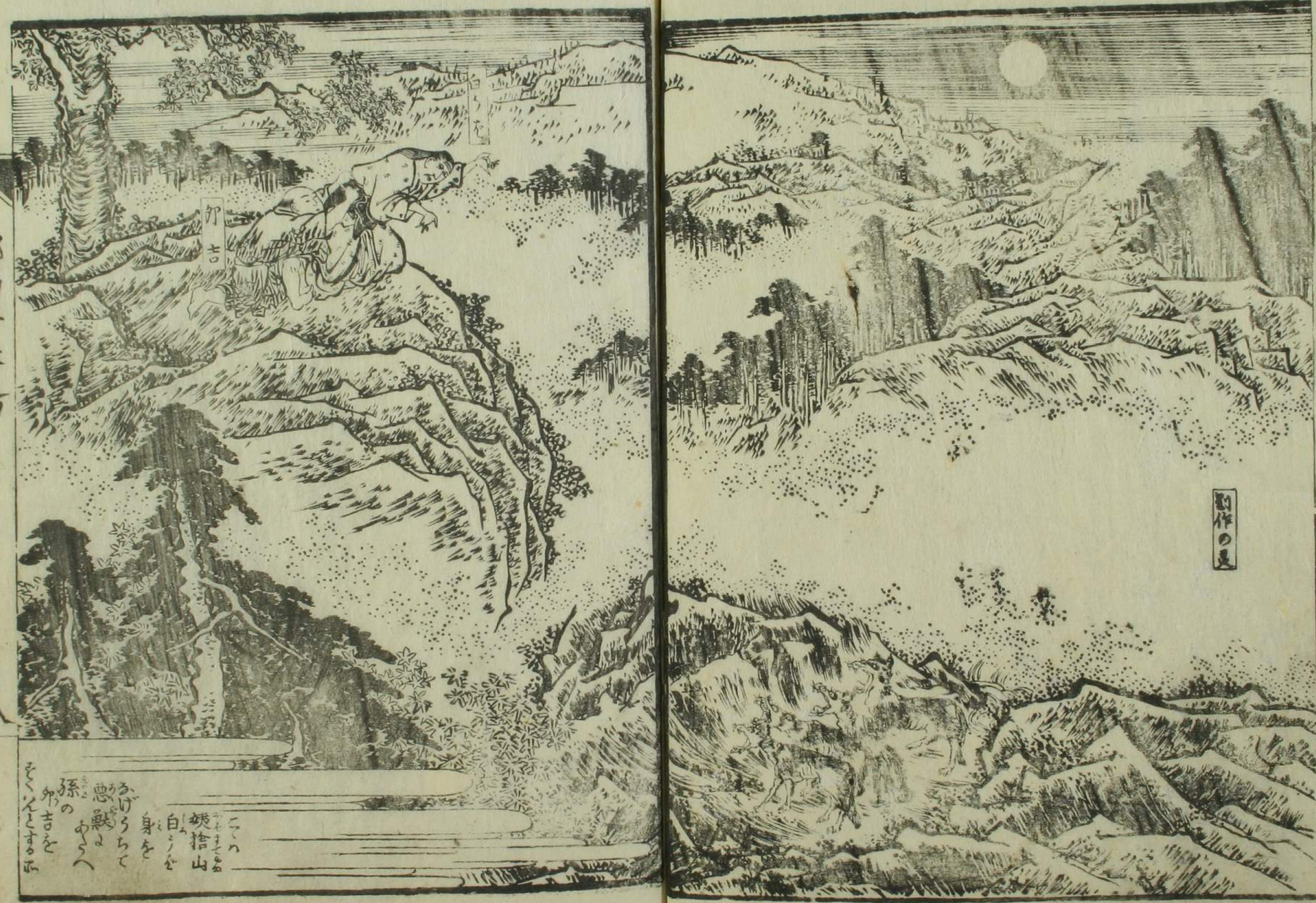
我わがのこゝろにお嗽うるべりしふ此世の果報つとりて怪ま死をとるも後世の
 かるた助修と名号以唱へ居るにえるは芳しの香のて空に樂の音の
 のまへには正の癖耳と振仰とて見えりしは善光の方に紫乃雲の
 とま引籠るたの降しやあん我目の只物の光の方に見えりしは夫の思
 れと根もの皆迹のとて被下をるし然れと紫乃猛獸の中も附性性
 肉く空頼母をなれ物なればづちも又抱くまやせん其附のゆて其
 方のとへと足はけはしれ事なれば今と物語も為さりし憂お
 付てのこも一方も思ひつけられて懺悔のたま清のぞよ此方の祖父の常よを益
 益救生を好て目よるも獸をも嫌はさり終には惡報のて我も支離る子を産せし後にこそ道公發して家出の仕終ひつと從
 從の報を我も獸のたま今骨命を失はく責と其方の途之りて父

別く作られし告ぐ祖父祖母の亡迹を吊りそのほろをよりしそれよほろをよりし
 又相か悪者おらしまれて剛作は親しまね弟の終末の不便なれば一言のいふも送ましまれと際どうんの不用のと疾と引立しは知言のたま
 を揚て泣けりつらいや其迹とと傳言終る父をと世六月未小既に囚屋の中に果終ひま終れと年祖母は知らしまれて歎うせりなと
 兼くと入まれつと今日をとりまりしは母と頼つるも今の終ひつと
 惡者よらしまれとと思はれば公持終へば羨しりなりし誰をと後りとせん
 今の祖母とりおし此亦は空の洞空木の中も竜王居て未の實櫃の實を
 拾ひまりなりしは公持と思はれば公持と思はれば公持と思はれば公持と思はれば
 流し出る涙の限の河歩流りせしととえり燒と此ことをと思はれば公持と思はれば
 泣きも泣れどおし果し居りしは向の桂の梢を然も恨めしまり打

はりのりて。いふ執念木魂ありとも。我牙を捨てて詫つればよもなき事と
いふ人のなも仇の月を影も障る。此指を折てうれ山風の
吹ぬぞと天を仰きて極口流涙の。あそ尋の柱も枯果ねへくさるるに世
踏の雁草の虫のささるる月。又雪よあられて恨の人の袖より曇
あもあふた物のさるる笑つては。き根なるをまき悲し氣は啼り。
婉かきて釘吉次。立命長き。歎の程と知く。今一度別れが教
かやとは。ほろきぬの頼み。ふまきくと存命層々。やの方さく世に耳は
笑るる形。我如く罪途と者へまき。此之は死小あられて。独月も星
も。さ方なく。獣の甜食として。いとも。少くも目をや。えん今。実よと
うらぬ牙を。秋遊年。尼仏小あ。ひて我と。狼よ投てん。其際。疾
山を逃れ。生よ。世あ。情あ。人も。さ。し。と。や。さ。ふ。よ。と。云。捨。と。は。名。道。と。

遠出く群たの猛獣の中。小牙を投てん。それの孫ハ。怒り。死あ。ごと。付
いれと。幼力あ。い。う。で。と。き。ま。き。ま。ま。と。く。始。う。び。落。ね。じ。然。る。間。
遠の谷。注。お。聲。して。さ。ほ。り。終。へ。あ。や。せ。じ。終。る。と。唯。り。か。る。者。あ。
や。細。き。声。あ。て。虫。の。音。あ。も。終。る。や。う。な。れ。と。不。思。議。の。婉。が。耳。お。や。つ。て。怪。
小夜中。あ。杉。人。も。い。の。じ。狩。人。さ。ら。も。誰。も。あ。れ。人。悪。し。折。る。符。つ。け。
釘。吉。次。一。つ。を。頼。み。預。け。や。と。い。ひ。て。さ。の。こ。を。え。あ。れ。が。月。も。膿。あ。ま。を。お。
る。夢。の。中。お。氣。の。ご。と。く。あ。る。の。の。歩。山。も。さ。い。風。も。遊。る。や。う。あ。て。尾。花。
分。つ。け。方。へ。あ。る。の。鬘。方。髻。の。間。近。く。旅。修。ふ。え。失。ひ。う。や。が。て。空。ま。よ。り。
耳。も。あ。る。か。さ。を。と。り。て。さ。の。あ。く。は。り。上。り。其。さ。ら。る。の。の。ま。と。海。の。中。
あ。さ。へ。て。お。と。る。く。牙。の。毛。ま。ま。空。の。秋。風。も。い。も。肌。を。く。打。つ。わ。る。が。ら。其。
人。を。さ。る。小。煙。を。隔。て。う。や。う。あ。て。あ。ら。る。ら。ね。と。別。れ。は。見。ほ。つ。か。く。さ。る。う。ら。び。

八 新撰詩卷之四



創作の長

白の身
媛捨山
孫の
外吉を
あつて
思
あつて
あつて
あつて

了切吾来白

けりとも忘れて是のいふもあはれぬかそ播さづりたるは打吉もよと
 取継りし孫の祖母の袂より姉の孫の袖をさへて有るは諸君よあされ
 けりよ愛するわさつる物を何れに返れぬと見返れば別世のありし早のうきと
 ともてあておとりの髪を肩より振り上げ岩窟に腕つきて顔も上と泣き居るは
 実なる亡者とぞ見て月のあふ影もよほし又まよふは消失やせんとも危あそ
 蛇も打吉もよを言念仏してはりりなり其時亡者秋の蚊の鳴りたる
 声しそあやう一度死したる者の影さごうあて入るもよほし怪しくもひく
 けりともあはれんと公若しはれは一とらうけへあはれせん我既死して冥途にお
 ひきたるも忽ち閻魔の庭におられく彼滴の鏡の前に至りたる時我方は犯
 めして目代がよよいと殺されしをあらせしむ母を慕ふ者もやえ後ひえ
 王の宣ふやう汝正はして罪を親を孝の公める者なれば長はして栄ゆべ

を痛すいふが亡父が生前の悪行汝は報ひ給はば横たはの死を遂より然
 ども亡父が業因を汝が身おろけく故と老母が多年各光寺の如きは信心
 をいじよれ徳もよめて父が永劫の苦しみはけだ離しはれば横死をも歎く
 べしと總て報ひし現報は報後報や報とを四種ありて現在にその身小
 報かあれは世に孫子も報かあり汝が如くの孝子にしてかかれ無量の罪は
 かくれをよくせむは天道明らかなるは眼もみん今周をこそ一深をこそ
 の修して玉の塵もくわげせむ仏の分別業経とや人の文を引く汲せむ
 かう壁なり世お人ありて生涯は意は各業を行ひしも命終りて地獄なる
 あり又一生は悪業を行ひし人も死して天上おけるあり其の意いふは
 りふるは阿羅の神智は悟り給はば凡夫の疑ひかたふ入ることも宜なり是
 これを身くの先世の罪福の因縁は己は熟し今世の罪福の因縁のいふは

熟せざるがゆゑにされば皆人にして不幸な事ひは沈む悪人にして善事な事
 りも因果應報の志は違ふ所のこそあれ終に善悪の報ひるはことば
 されざる短く傍りて天を私ありと怨む者もあらず汝は至仏世界の田舎
 人なり生好の重なる公は疾く宿報る人とあひのびるも野も世も恨む
 汝も母を孝養せしむる先立る母の之致さ死なざるうと長る
 蘇生もさせまじとれど然て父が罪障消滅の因縁小遠入る。よく
 總六附の時を免て娑婆世界に往うよせ母を孝養の志は遂げ
 んこと相し方死す父を救ひ魂しひんかまて母を孝養其功德度大
 且汝不日法王に生れん其母父母引接せよこれより今世修行
 の因縁既熟する時とあらんと告終る終ひて玉の簾忽ち卷下と
 と多人我のすむち測くする世あり扱の母は仕へよとて喚びりしと物

こもと嬉しくしていそぐに我の前よりまきり人あり。肩傍の布袋はくさり。夫はあ
 るの越後の國拍子の任人まきとありて平く父の名ありたれば驚て走り
 走し小其人我を顧み玉の如くする涙を落し汝が對て父と名告人も恥じ
 られど恩愛の情持する方あるにまきゆる今も炎玉の汝はまき後ひし
 ごとく我のけり前殺生とてして適現報を致し一度道心起せし我
 懐の公後おまきと名告の乃不善光寺に常燈を寄附せしめて却て是る平
 とし者小其令々賺められ死後の悪念けり前の悪業に感じて終に善田は
 の才を受しが妻が念佛の功力ありて去る五月の未だ畜生とと離れて
 今の中有わ吟へる然れど餘業未盡親の因果の手小報ありし世の縁
 子らつを汝をさし其途の人とあせり。はてしなくも曾平よりと見え
 て慈悲の長者をも思ひのこころ殺しよとこれ孫をヤハ子とあせ

ほとけの残りくさり殺し果るも時意の災に罹おはせ申すは焼てせし量
 徳切の苦と受へりし不焼くもよれ妻子を捨て忽ち罪亡びて進ま小天
 上よけりべと考とありぬ扱るん炎王の沙汰にて暫し間此中有る在せ終ふ
 ろり終るおけ申育のふとほ何れも臙夜の如くして水の音虫の音もせんかこ
 なく淋しけれは汝中陰の間息ありて我が徒然と慰まられよとて又とどく
 とほく別とがさげのうらふ我の恨しあま去べき死るぞん父よあはれは
 とも死るるなとさ人思ひて母の歎を忘るるれと又十年身の間
 一度は取ると必地してつと滯とあせせき孝養といじ居り然るも今骨父
 の祥月の忌日に尚母の遺比の進音の切徳ははるる天上の果をばく月
 宮おひえられ終ひぬ骨を空中お物の音しるる天人の音声樂を凌終ひ
 しもかれは父ぬしの上へ冥王をばし今より母の教をばし添ていりもりよむ

亡者の親おつえしとあはし唐土もあつと申すは焼てせし量
 我嚴こそ朽物きてなれ母を大事ぞと思ふを焼とも切も
 際失へりし屍子なりと一体なれば仮し卵吉が身成やとひと孫子おん
 のこの孝行をこそとさしすあても先此所をりて有縁の人成行さん
 よころろよ卵吉お負りれ終へ勢あやが終ひそと現の人の持りて
 つがくと語らうら焼の始終渡よれて伊居りしが母は歎ひるれ孝の子が
 いふること何れも疑ひしやんとて卵吉が肩を負れんとあはれ
 三三またたね毒のいふ朽木の中うら焼なりともかた岩の上へ負下
 らんこといふおんんと然とがのあやあれたる卵吉が脊中は一向り
 ふとあつち負れられは山猿さぶの走るやうあて露おりぐあもつ走
 りた子の跡ははをて痕よりあつち卵吉が尾上たつ間よつち行ん

んえきりぬさる我亦瓜害ふむらてはめやふ送るんとむけの中と
表二三里をりやまつんととる河音るやへとゆつこの岐を
月有明山近く入果東の空あつる比その酒をそそれた軒を
かさあをそとひしく剛能が影外音が債ら離るるとえんし橋清て
どもゆらりたれば友人の又さうに悲しくてもそそ法沈居り

又米路の橋の埋木

此所ハ文級の八幡より水内を通る徑踏して夏での旅人の往ふ方
あつねといつも犀川の水傍て丹波を山といつ所の波をえねる村を
旅人の限りの必此路をゆりて水内の曲橋といふをそとる音を
曲橋より道の川下は又ゆりの橋あり南北の截涯多く聳へ橋と水と
の間凡十丈余りある水の紺青のえりて岩切通一渦巻ゆる岩は

あつての垂をちりけが如く漏るりて見る者目やれ肝を冷まるといふ
其橋といふもそとるれ丸木とされがらに打渡して木より木筋の
とせりあて足るんゆりては泳ぐ又米路の橋をそとる音を
折くはて谷川を落入徒らぬぬ人も先く少くざりたれば旅人の
けりも渡らぬるやとていふ音を危きなり今年も秋の水も丹
波を山や苗アらん路のこの鈴音も朗々と明行空をさめしは
く打あてて此路の奥の酒をのらるとはりあられらとさりり
進する馬あり鞍の上は襦袢曲糸といふ物とて年の経二八斗を
人ともる謙倉風の女房が手あてる坂赤田の小坂越して水内を
いりり此女房の従者とて男男女女十餘人斗り坂を馬は後れ
馬馬掙をせれりるそとる音を小めま揚て招きかゝる銅

の狭間ひまは白くしろくとて内うちは村むらの男おとこハ此こゝ軒のきの酒さけ施を遠とほくくより烟のけを吐はきけし
とあきろく酒さけをのろく初はつ戸と明あくくとほくて茶ちや薙ひ薙ひ漏はるる間ま馬うまよま
とせと盡つくくくるるををももくく女おんな房むらのの歩あきき物ものををももくくままててはは村むらをを呼よぶぶこの
癡あほう者もの酒さけをを吞の入のくく見みええりりももせせとと竹たけのの付つ乳ち母はは中ちゆうのの香かもも漸しくくおお退ひ付ひてては
馬うまののとと尋たづねねはは村むらのの男おとこ初はつてて公こう付つてて狼ろう狽たいああくく行いくくねね体ていをを青あお馬うま放はなすすは
取とりりつつるる取とりりつつるる馬うま放はなすすははとと打うち拍ぱ子しどどりりてて退ひるる此こゝ馬うま未いま此こゝ道みち筋すぢ
知しららずずりりつつるる往ゆくくとと方かたへへのの往ゆききににかかのの久く米べい路ろのの独ひとり木き橋はしをを半はん渡わたりりてて橋
ののままりりれれ攪かききししややおおんん突つととまま角かくりりてて在あるるとと従したが者ものもも見み付つててゆゆりりのの
とと驚おどけけはは付つ走はりりのの筋すぢりりてて引ひ戻もどどりりてて橋はしの上の上の二に三さん間かんおおくくるるやや七しち八はち丈ぢゆう斗とりりの
木きをを此こゝ方かたをを五ご入いくく幅はののゆゆれれ赤あか糸いと中ちゆうくく細こくくてて馬うまのの鼻はな細こくくととんん中ちゆう
るるははてて虫むし食くるる埋う木きををぬぬれれぬぬくくややううぶぶ人ひと馬うまののををままははれれてて折おぐぐは

れれぐぐととりりぬぬれれ川かわ水みづのの逆さか浪なみををくくととるる清きよままののままももくくとと遠とほくくとと遠とほくく
るるをを侍さむらいもも氣きををいいららてて誰たれゆゆけけ彼かゆゆりりとといいととんん教しよつつらら七しち我われゆゆんんとといいぬぬ
者ものはは女おんな房むらのの馬うまの上の上の在ありりてて一ひと目めももあありりととるる忽たちちちややめめななくくああるるとといいはは
鞆たもと壺つぼははぬぬれれ伏ふくく其その後のち消き入いるる従したが者ものももかかととるるややいいまま肝きんもも失うせせ
てて西にしのの又また川かわ水みづととおおししててあありりののああせせとといいひひあありり其その村むら一ひと人にんのの付つ傍はた軍ぐんまま
中ちゆう。柳やなぎ葉は倉くらをを出で日ひのの行い村むらのの傍はたをを離はなれれとと拍ぱ子しままてて平ひらららくくああとと願ねがひひつつるる
途みちのの間まににかかれれ跡あと車くるまののおおききもも又またのの運うのの持もちちとといいひひあありり志こころははああらら雨あめののはは村むら
急いそりりあありり起おこりりるるゆゆめめれれ先まききををささ殺ころすす後のち各おの腹はらううれれ切きつつ中ちゆう鉄てつををせんせんゆゆ
かかげげんんとといいのの皆みなをを同どうじじのの付つ又また乳ち母ははよよひひてておお許ゆる達たつははこれこれよりより濡ぬれれぬぬゆゆりり
ててけけいいをを殿とのままととええ上の上の足あし跡あとをを守まもりりたたとといいひひあありりややううててはは村むらををああくくままれれ
かかよよじじととすすままひひつつ不ふ清せい氣きををいいららぬぬこれこれははままいいににはは出いででししるるままあありりぬぬのの

に出る。この馬は桐原の市を經五郎文小買を尋ねると、
 先づ上着より我の袴大切なるに付、夫をこそ好きて先入
 と何れに遣はさん馬も命の惜るべし、悪事を知りてのよも
 恥の由運の拙と故に鍾五貫後らする。有る命はもるれん
 さらりて碎泣は泣が情に奴めて言なむとせそと皆まう
 るお忍して泣いてと、ひるみ入るとは付を引伏すも、
 切んとするものにて、南無阿彌陀仏と同音に唱へり。此
 酒盃の軒は注麻入して居るが。此声はめとて、これい
 く乳母とて、と驚き、驚きと橋の上とこれば、今も馬人
 とも小落入ぬと、はなれぬ、婿もそと南無阿彌陀仏と唱
 はしや、ぬれを助まをせんともせと、此くぐり、おはひて
 大死をせり。

と、さうもあつた不斗のひして張魂の鎌倉武士よりひては
 には塞がうと、信ども、さうめて、実と老人の多く、の
 る、な、ぬ、ま、も、あ、の、婿、が、え、ま、ま、と、い、ひ、合、せ、
 白、婿、の、り、と、ふ、り、と、ま、り、あ、の、人、助、も、や、あ、の、
 使、る、の、り、と、此、年、も、秋、の、ゆ、も、あ、ら、り、ん、も、ま、も、
 但、し、聊、も、ひ、ま、り、の、ゆ、の、ま、り、試、さ、ら、ん、と、て、
 け、の、酒、を、の、の、羊、引、拔、き、を、先、に、垣、根、の、草、
 ち、つ、橋、の、り、と、走、り、行、を、い、う、す、る、に、う、と、皆、
 を、引、提、て、独、木、橋、を、這、渡、り、ま、り、四、足、を、揃、へ、
 いう、ゆ、も、そ、こ、に、入、て、お、脚、の、間、は、し、お、せ、
 二、脚、を、喰、一、は、喰、が、あ、と、う、人、に、五、寸、
 此、馬、を、退、て、お、を、は、り、す、踏、



相崎家



久米の松
柏森
おひりの
傷と
落人んと
まゝ



疾く又よよと一口喰らひ引ひびく足を踏戻し喰ふ斯くも自ら
 然る二三間めと踏戻す付外吉様の走る如く馬の傍らを走りぬけて
 前め玄徳面をみる難う平地へ押りかかると者焼が女と感入外吉
 働を賛め入り其付侍走りて女房を抱かすも中へ後へ唇のまじ
 かりし又これ強惑めわどお後まるとある馳馬は着るさどすも
 彼の醫師もふ合入りれば所は懐引れど纏るて後て兎角扱ふ女
 房おびえさる中うめて目をこらして我のいしほして爰も在るぞと
 終へるとほび合て焼が女と怪我するり荒場と語れば我は付も
 くるの独行が忍ぶ目と寝る音光寺の如念ぶるも行はじ
 此と物の音さる所あて馬の歩を止りて怪して目と見れば尋も
 有へさ酒の上は在と見しより魂も失く仏助後といひつるも
 見られ

と後後のこころを踏んて其跡をうらまはし水の底に空しく成
 焼のりる老女も其老人赤あつて圓の彼下より乳母を此方へ
 中へて焼も卵吉の懐の内へ入ませ懸掛ひらて抱かせるはいて
 わまの命拾ひするが目物として従者も酒をよびて呑たれ押退しく
 うり指さるる侍をわらに付の癡者も浦山が何と入る在るが術を香
 とや成らん殺さんとさるひつれ付の盃持るさめとくおづく這出
 愚ながら越後の圓まとりても誰のらん拍崎及の揚貴地祇園女向も
 させ修の上禱の命拾ひの統りの誰が為すかあさるさるおとと折
 こらせさるの焼が女柄も出れば焼や童次登りさるも已に働して
 酒もさるさるもこの過の高名も然れば帯さるりの配南の有も若
 かじやと涎を落しつるひくしては怪きこの扱まねおはしくおりて付

くわくくわくひ土で。淋しい所至極せり。よき中真りにいり。まうんぞ。之を
さうまれの打さる。りて返さ。よれ錯はりて。山前方も。得ま。ふ在成て。山の上の
もり登の。所。必。ぎ。どり。せ。終。く。小室の。宿。う。て。街。一。の。声。は。し。と。守。り。せ。終。り。
際も。な。れ。者。あ。て。い。荷。あ。弱。牽。の。夫。あ。一。番。小。使。ま。れて。度。く。都。由。り。登。り。大。
舞。省。の。元。あ。も。そ。う。く。わ。れ。れ。る。浮。馬。樂。謡。ひ。ふ。て。此。比。の。街。を。あ。て。口。
付。も。の。儀。ひ。ら。し。い。小。室。節。と。申。め。さ。り。ら。已。が。淫。ひ。出。ら。る。や。こ。こ。そ。
之。嘉。辰。令。月。の。古。代。る。も。り。も。出。着。代。わ。ら。よ。く。こ。そ。め。つ。わ。そ。と。せ。ひ。ひ。ま。ら。
ま。ら。て。い。ろ。ち。も。行。く。を。れ。く。手。拭。の。布。成。子。端。ま。り。さ。り。て。振。ま。つ。既。は。淫。し。
物。と。ま。り。を。そ。れ。の。奥。あ。の。せ。ご。と。な。る。ぐ。れ。と。ご。の。を。下。は。は。あ。近。て。し。
それ。の。道。と。ご。ご。ま。ら。ち。先。今。却。入。の。め。と。は。も。よ。り。て。あ。わ。は。ら。る。淫。
り。こ。こ。こ。成。ら。る。さ。かり。て。あ。る。べ。し。城。の。怪。を。へ。う。て。あ。り。て。此。男。が。拍。崎。及。の。は。右。

をいひまら。成。て。扱。の。我。古。を。の。由。縁。の。由。方。なり。と。初。て。知。り。亡。者。が。有。縁。の。
人。は。つ。え。と。い。ひ。も。扱。り。て。此。人。の。ふ。ふ。こ。そ。と。頼。母。く。あ。ひ。居。る。や。と。あ。の。
女。房。城。を。近。く。扱。り。よ。せて。給。布。と。い。は。ら。は。皮。靴。より。取。り。ぞ。これ。友。人。
あ。と。と。さ。る。も。今。日。の。喜。の。云。は。く。と。べ。れ。く。も。な。れ。ど。か。る。旅。の。乃。と。て。あ。は。れ。
と。あ。ふ。む。り。の。も。の。い。ふ。せん。足。の。い。は。じ。め。成。え。る。も。中。で。は。春。の。
か。り。登。る。べ。ま。れ。其。折。辱。保。ま。せ。と。今。日。の。お。び。を。な。せん。と。と。家。の。何。下。の。
程。や。肉。の。重。の。孫。小。こ。そ。子。あ。ら。も。有。り。と。熱。心。同。ろ。れ。ば。就。源。を。ま。れ。ま。て。
さん。れ。め。れ。る。事。が。父。一。人。を。扱。扱。か。を。居。ひ。が。それ。あ。も。此。程。在。お。れ。れ。
ゆ。は。怪。る。者。の。お。さ。か。り。て。ま。の。あ。又。級。山。に。掃。ら。れ。け。り。これ。今。の。家。も。あ。り。て。
孫。と。二人。吟。ひ。あ。り。あ。て。と。そ。い。人。と。語。り。女。房。の。と。う。て。あ。る。を。職。や。映。捨。ハ。月。
と。じ。里。の。名。と。の。こ。思。ひ。て。う。も。行。手。あ。ら。り。て。眺。め。身。つ。る。あ。さ。る。疎。ま。し。れ。

加吉野

十一

所もそ有れ。いふ情なれ人ありとも。老人を山は捨人申すやあると昔物
 語の上を主人の心ぞおひ居つる。お現おさかする女もわりのれつな。それを賑
 持する娘が日比の佐と。とそ有んと哀まづれば。乳母中間女もて巻りて
 たりけ。誠お夢如くす。鬼に宿り。今古里をどひ捨く。柏崎へあらせ
 いと住よ所をさといあり。娘に此詞よはきて昔の身の上へ入とせ。ほり
 ち落れらるさまの先祖の面伏と。とどひ使てさもりの出とく。の心むじの程
 有がとこれと斯忌く。あまやととる人。お俱一呑せんも。使なれ。今
 一向世とされて。昔光さの傍。お這入斗の小家つら。り。おして。朝夕佛ふ
 け。て。終ら。やと存の。と。の。女房。竹をよ。出。て。然。く。斗。ひ。て。得。せ。よ。と
 お。を。れ。の。ひ。り。て。い。ら。が。昔。光。さ。も。て。の。使。せ。ま。け。ら。あ。い。じ。と。さ。ら。を。れ。ま
 ら。女。房。の。懲。果。ぬ。と。て。り。の。其。馬。お。娘。を。う。れ。ま。せ。卯。吉。も。も。皮。お。馬

お打をせき曲搦へと引出せ。かの口付男より。おひけ。お。ま。り。娘。君。の。は。神
 めて。の。り。も。も。れ。れ。ど。五。五。文。の。馬。お。拾。ひ。ら。上。お。酒。を。入。ん。ご。た。う
 ぶ。る。喜。び。い。ら。で。流。ひ。と。や。て。の。使。す。ま。ん。と。て。も。能。く。お。振。つ。酒。が。う
 べて。終。醉。と。よ。お。ひ。ご。ま。う。せ。ら。る。と。昔。ま。て。う。へ。の。使。の。者。も。嗚。呼。は
 きて。お。ま。ぐ。ふ。ま。ゆ。つ。れ。幼。の。敷。よ。引。て。と。ま。ま。は。て。を。群。行。る。

埴科寺の蘭金剛

叔。ま。さ。夕。霜。を。告。を。お。呼。び。て。お。も。の。祖。母。と。賺。し。出。文科。山。は。捨。せ
 ら。れ。狼。を。噉。れ。と。ん。と。き。て。我。身。を。か。が。み。と。て。無。勿。俵。罪。跡。と。い。ひ。を。も。ち。つ
 る。お。と。後。悔。の。心。を。な。く。さ。り。ま。い。る。あ。は。な。れ。家。の。軒。り。る。月。お。面。ひ。夜。一。枚
 敷。れ。卯。吉。が。何。地。行。え。夜。より。卯。吉。も。ゆ。り。尋。ね。お。細。く。て。唯。独。あ。る。ふ
 名。を。又。尋。り。て。今。の。我。許。は。移。り。住。ね。と。て。逃。し。ま。も。す。く。連。切。と。朝。へ。引。住。が

少ちのまね調なまももここが不得はして家とま人賣拂て鉢はしらるら只射の間お
 七はの打入く負後りなれハ足非今一勝負せんとあげけども質種もそなれハ
 為方なりて長老を殺害したり夜おろする聖王柄の七首の々霜も如く
 せと居し金しを取出して水皆懸の宿より買る古物買の公相も幸てこれ次本と
 徒はして捨ちわせんと揉一たれ勝負の庭おろす門出て後ゆけの虚々小
 てハ福樂はし酒とろろ香そそ生競ひに往へて夕霜買り母が紫之
 浦ととそれ小萩もそろりけしが養子板敷を割碎て焚りやとそら
 又廻りま這入の庭の片隅を薪一把を有て長老のお身掛心いうて思お
 りんよれ物ありと云ふはが折之と刺鍋の酒浦おろす後れ出てある居
 々が頻り小香氣のとれがゆいどとひて一枝をりようとひとく其火とと
 飛散て各太く回よりじりて身らにひとおろすれが枝を投出して突とます

